

菊地敦子先生のご退職に寄せて

学部長・研究科長
今 井 裕 之

菊地敦子先生は、2000年に関西大学外国語教育研究機構に助教授として着任され、機構時代は主任を、また外国語教育学研究科では研究科長代理、外国語学部では副学部長、そして外国語学部カリキュラムの核をなすSAプログラムの委員長を歴任され、25年の長きに渡り、本学部の礎を築き、その発展に寄与してこられました。研究面では、言語学、特に意味論、認知言語学分野の研究や、それを基盤とした翻訳・通訳に関するご研究を精力的に続けられました。福井七子先生との共著・共訳により出版された数多くの翻訳書および翻訳研究論文は、菊地先生と福井先生のお二人が関西大学にいらしたからこそ実現した貴重なお仕事と言えるかと思います。学部・大学院での教育面でも、言語分析分野、通訳翻訳分野の教育を牽引され、学生たちを深く愛され導かれました。そして本年2025年3月31日をもってご退職になられます。菊地敦子先生のご退職の日を迎えることに強い寂寥の念を禁じ得ません。

2013年に関西大学にきた私にとっては、菊地敦子先生といえば、学部の留学プログラムを一手に担い、学生たちの留学生生活をより良いものにすべく学生をご指導されながら、世界各国の留学先を訪れてプログラム改善や新規校開拓をされていた印象が強いです。当時、学務委員だった私は、SAプログラムについて、その内容や規模や維持運営の方法を知れば知るほど、こんな仕事ができる菊地先生とSAチームの皆さんに、そしてこんなカリキュラムを維持、発展させてきた外国語学部に対して大袈裟でなく畏敬の念を抱きました。先日、ある新聞社の記者から学部の教育について取材を受け、SAプログラムの制度内容を説明したところ、「それを先生がたご自身でやっているのですか？」と、にわかには信じてもらえませんでした。もちろん、学部オフィス、教務センター、SAセンターと教員が丸だからこそ実現できていることを説明しましたが、それでもなお驚き感心されていました。

菊地先生の最終講義のタイトルは「外国人になって見えること」でした。この時この場所であれば、敦子先生からでなければ聴けない講義だと感じた多くの在学生、卒業生、同僚たちが先生のお話を聞きに集まりました。敦子先生ご自身の幼少期から現在に至るまでのご経験を、多くの聴衆にとっての母語である日本語で（いつも講義は英語でされる先生が今回あえて選んで）お話しくださいました。前半は環境変化の中で自分自身が誰なのかについて揺れ続けたことを、後半は、学生指導のエピソードを通して、予断を持たず他者を受容的に理解することの大切さを、私たちに深く沁みるように言葉を選んで伝えてくださいました。涙が出ました。留

学して「外国人になる」経験を積むことで、先生のお話しの少なくとも一部を「我がこと」として共感できた外国語学部の学生たちはとても幸せ者でした。その外国語学部で敦子先生と同僚として一緒に働けた私たちも本当に幸せ者です。